

環の単純拡大に現れる整拡大となる部分環について

田 枝 覚・吉 田 憲 一*

岡山理科大学大学院理学研究科応用数学専攻研究生

*岡山理科大学理学部応用数学科

(1995年9月30日 受理)

序

環（この論文では環は可換環で単位元を有するものとする）の単純拡大に関する研究において、anti-integral と呼ばれる元を附加した拡大について詳しく調べられている^{3,4)}。

この論文では anti-integral な元 α を附加した環 $R[\alpha]$ の部分環 $R[\alpha] \cap R[\alpha^{-1}]$ について考察してみよう。 $R[\alpha] \cap R[\alpha^{-1}]$ は R 上整拡大な $R[\alpha]$ の部分環である。 R をネーター整域、 K を R の商体、 α は K 上代数的な元で拡大次数を d とする。このとき、 α の最小多項式でモニックなものは唯一つ定まる。それを

$$\varphi_\alpha(X) = X^d + \eta_1 X^{d-1} + \cdots + \eta_d \quad (\eta_i \in K)$$

とする。

$$I_{\eta_i} = R :_R \eta_i = \{a \in R \mid a\eta_i \in R\}$$

で η_i の分母イデアルをあらわすとき、

$$I_{[\alpha]} = \bigcap_{i=1}^d I_{\eta_i}$$

を拡張された元 α の分母イデアルと呼ぶ。 $d = 1$ 、すなわち $\alpha \in K$ のときは $I_{[\alpha]} = I_\alpha$ である。

$R[X]$ を R 上に一変数 X を附加した多項式環

$$\pi : R[X] \longrightarrow R[\alpha]$$

を自然な環の準同型とすると

$$\text{Ker } \pi \supseteq I_{[\alpha]} \varphi_\alpha(X) R[X]$$

である。この包含関係の等号が成り立つとき、元 α は *anti-integral* と呼ばれる。元 α が K の元で integral かつ anti-integral であることと α は R の元であることは同値であり、拡大次数 d のときは、 α が integral かつ anti-integral であることと $R[\alpha]$ が階数 d

の自由 \mathbf{R} -加群であることは同値であることが知られている。

Mirbagheri-Ratliff, Jr によって α が \mathbf{K} の元であるとき, α が anti-integral であることと $\mathbf{R}[\alpha] \cap \mathbf{R}[\alpha^{-1}] = \mathbf{R}$ であることは同値であることが示された²⁾。

$\mathbf{R}[\alpha]$ の部分環 $\mathbf{B} = \mathbf{R}[\alpha] \cap \mathbf{R}[\alpha^{-1}]$ は \mathbf{R} 上の整拡大であるが, この部分環 \mathbf{B} についても詳しい研究がなされている。

$J_{[\alpha]} = I_{[\alpha]}(1, \eta_1, \dots, \eta_d)$ と定める。Grade $J_{[\alpha]} > 1$, すなわち p を \mathbf{R} の素イデアルで $\text{depth } \mathbf{R}_p = 1$ なら $J_{[\alpha]} \not\subset p$ となるとき, 元 α は *super-primitive* と呼ばれ, super-primitive な元は anti-integral であることが知られている³⁾。

さて, まずはじめに次の結果からはじめよう。

命題 1.

Noetherian domain $\mathbf{R} \subset$ quotient field \mathbf{K} , $\alpha: \mathbf{R}$ 上 anti-integral element of degree d , そして \mathbf{R} の元 a について, $a\alpha$ は \mathbf{R} 上 anti-integral とする。

このとき $\mathbf{R}[a\alpha] \cap \mathbf{R}[(a\alpha)^{-1}] \subseteq \mathbf{R}[\alpha] \cap \mathbf{R}[\alpha^{-1}] \iff aI_{[a\alpha]} \subseteq I_{[\alpha]}$.

証明

$\zeta_i = \alpha^i + \eta_1 \alpha^{i-1} + \dots + \eta_i$ とおくと $\mathbf{R}[\alpha] \cap \mathbf{R}[\alpha^{-1}] = \mathbf{R} + I_{[\alpha]} \zeta_1 + \dots + I_{[\alpha]} \zeta_{d-1}$ である事が知られている¹⁾。従って,

$$\mathbf{R}[a\alpha] \cap \mathbf{R}[(a\alpha)^{-1}] = \mathbf{R} + I_{[a\alpha]} a \zeta_1 + \dots + I_{[a\alpha]} a^{d-1} \zeta_{d-1}$$

故, $\mathbf{R}[a\alpha] \cap \mathbf{R}[(a\alpha)^{-1}] \subseteq \mathbf{R}[\alpha] \cap \mathbf{R}[\alpha^{-1}] \iff I_{[a\alpha]} a^i \zeta_i \subseteq I_{[\alpha]} \zeta_i$ がすべての i について成り立つ。又 $I_{[a\alpha]} a^{i+1} \subseteq I_{[a\alpha]} a^i$ 故, これは $I_{[a\alpha]} a \subseteq I_{[\alpha]}$ と同値であることがわかる。

さてここで分母イデアル $I_{[a\alpha]}$ について調べてみよう。

$$\alpha^d + \eta_1 \alpha^{d-1} + \dots + \eta_d = 0$$

より

$$(a\alpha)^d + (a\eta_1)(a\alpha)^{d-1} + \dots + a^d \eta_d = 0,$$

これは $a\alpha$ の \mathbf{K} 上の最小次数のモニック多項式であるから,

$$I_{[a\alpha]} = I_{\eta_1} \cap I_{a^2 \eta_2} \cap \dots \cap I_{a^d \eta_d}$$

を得る。よって, $I_{a^i \eta_i} = I_{\eta_i}: a^i \supseteq I_{\eta_i}$ である。

今, \mathbf{R} の元 a が各 I_{η_i} の素因子に入らないとする。このとき, $I_{a^i \eta_i} = I_{\eta_i}$ であるから, $I_{[a\alpha]} = I_{[\alpha]}$ 。従って, $aI_{[\alpha]} \subseteq I_{[\alpha]}$ が成り立つ。そこで次の命題が得られる。

命題 2.

Noetherian domain $\mathbf{R} \subset$ quotient field \mathbf{K} , $\alpha: \mathbf{R}$ 上 anti-integral element of degree d , a を \mathbf{R} の元で, $a\alpha$ は \mathbf{R} 上 anti-integral, かつ a は \mathbf{R}/I_{η_i} の非零因子となっていれば,

$$\mathbf{R}[a\alpha] \cap \mathbf{R}[(a\alpha)^{-1}] \subseteq \mathbf{R}[a] \cap \mathbf{R}[a^{-1}]$$

証明

$$\varphi_{a\alpha}(X) = (a\alpha)^d + a\eta_1(a\alpha)^{d-1} + \cdots + a^d\eta_d$$

故, $I_{[a\alpha]} = \bigcap I_{a^i\eta_i}$. a は \mathbf{R}/I_{η_i} の非零因子なので $I_{a^i\eta_i} = I_{\eta_i}:a^i = I_{\eta_i}$. よって, $I_{[a\alpha]} = I_{[a]}$ を得る。そこで $aI_{[a\alpha]} = aI_{[a]} \subseteq I_{[a]}$. よって先の命題より我々の結論を得る。

定理 3.

Noetherian domain $\mathbf{R} \subset$ quotient field \mathbf{K} , $\alpha: \mathbf{R}$ 上 super-primitive element of degree d , a を \mathbf{R} の元で, a は $\mathbf{R}/I_{[a]}$ の非零因子であれば, この時,

$$\mathbf{R}[a\alpha] \cap \mathbf{R}[(a\alpha)^{-1}] \subseteq \mathbf{R}[a] \cap \mathbf{R}[a^{-1}]$$

である。

証明

まず $I_{[a\alpha]} = I_{[a]}$ であることを示す。

$$I_{[a\alpha]} = \bigcap I_{a^i\eta_i} = \bigcap (I_{\eta_i}:a^i) \subseteq \bigcap (I_{\eta_i}:a^d) = (\bigcap I_{\eta_i}):a^d = I_{[a]}:a^d,$$

よって a は $\mathbf{R}/I_{[a]}$ の非零因子なので $I_{[a\alpha]} = I_{[a]}$ である。

p を \mathbf{R} の素イデアルで $I_{[a]}$ を含むものとすれば, $I_{[a]}$ は divisorial ideal なので $\text{depth } \mathbf{R}_p = 1$. α は super-primitive な元なので $J_{[a]} \not\subseteq p$. よって $(I_{[a]})_p$ は principal ideal なので p は $I_{[a]}$ の素因子。よって仮定から $a \notin p$. 今, $a^i(I_{[a]}\eta_i) \subset p$ とすれば $(I_{[a]})_p a \in p$ となり, これは $J_{[a]} \not\subseteq p$ に反するので, ある自然数 i で $a^i(I_{[a]}\eta_i) \not\subseteq p$, よって

$$J_{[a\alpha]} = I_{[a\alpha]}(1, a\eta_1, \cdots, a^d\eta_d) = I_{[a]}(1, a\eta_1, \cdots, a^d\eta_d) \not\subseteq p.$$

p を \mathbf{R} の素イデアルで $\text{depth } \mathbf{R}_p = 1$ で $J_{[a]} \not\subseteq p$ とすれば, $I_{[a]} = I_{[a\alpha]} \subseteq J_{[a\alpha]}$ 故 $J_{[a\alpha]} \not\subseteq p$. 従って $a\alpha$ は super-primitive element なので $a\alpha$ は又 anti-integral. よって命題 2 より我々の結論を得る。従って $aI_{[a\alpha]} = aI_{[a]} \subseteq I_{[a]}$ 故, 先の命題より我々の結論を得る。

次に $\mathbf{R}[a] \cap \mathbf{R}[a^{-1}] = \mathbf{R}[a\alpha] \cap \mathbf{R}[(a\alpha)^{-1}]$ となるための条件を求めてみよう。

補題4.

I を R の零イデアルでないものとする。 a を R の元で $aI = I$ とすれば a は R の可逆元。

証明

$aR \neq R$ とすれば aR を含む R の素イデアル p がある。 p で局所化すれば $I_p = aI_p$ 。

証明 $aI_p = R_p$, これは $a \in p$ に反する。 $I \subset p$ のとき $aI_p = I_p$, Nakayama's lemma から $I_p = (0)$. R は integral domain で考えているので $I = (0)$ となり, $I \neq (0)$ に反するので a は R の可逆元。

定理5.

Noetherian domain $R \subset$ quotient field K , $a: R$ 上 anti-integral element of degree d , ここで $d \geq 3$ とする。 R の元 a に対して, aa は R 上 anti-integral とする。 $R[a] \cap R[a^{-1}] = R[aa] \cap R[(aa)^{-1}]$ ならば a は R の可逆元。

証明

$$\begin{aligned} R[a] \cap R[a^{-1}] &= R + I_{[a]}\zeta_1 + \cdots + I_{[a]}\zeta_{d-1} \\ R[aa] \cap R[(aa)^{-1}] &= R + I_{[aa]}(a\zeta_1) + \cdots + I_{[aa]}(a^{d-1}\zeta_{d-1}) \end{aligned}$$

これらはすべて直和分解でもある。従って $L = K[a] = K + K\eta_1 + \cdots + K\eta_{d-1}$ より $K(a^i\eta_i) = K\eta_i$ であるから, $I_{[a]}\eta_i = I_{[aa]}(a^i\eta_i)$ ($1 \leq i \leq d-1$)。だから $I_{[a]} = a^i I_{[aa]}$ となる。仮定より $d \geq 3$ なので, $I_{[a]} = aI_{[aa]} = a^2 I_{[aa]}$ だから $I_{[a]} = aI_{[aa]}$ 。従って, a は R の可逆元である。

これによって $R[aa] \cap R[(aa)^{-1}] = R[a] \cap R[a^{-1}]$ であれば $R[aa] = R[a]$ かつ $R[(aa)^{-1}] = R[a^{-1}]$ となる事がわかる。

参考文献

- 1) M. Kanemitsu and K. Yoshida, Some properties of extensions $R[a] \cap R[a^{-1}]$ over Noetherian domains R , to appear in Communications in Algebra.
- 2) A. Mirbagheri and L.J. Ratliff, Jr., On the intersection of two overrings, Houston J. Math., **8** (1982) 525-535.
- 3) S. Oda and K. Yoshida, Anti-integral extensions of Noetherian domains, Kobe J. Math., **5** (1988) 43-56.
- 4) S. Oda, J. Sato and K. Yosida, High degree anti-integral extensions of Noetherian domains, Osaka J. Math., **30** (1993) 119-135.

A subring which is contained in a simple ring extension and integral over the ring R .

Satoru TAEDA, *Ken-ich YOSHIDA

Graduate School of Science,

Okayama University of Science

**Department of Applied Mathematics,*

Faculty of Science

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1995)

For the study of a simple ring extension $A = \mathbf{R}[a]$ over a commutative ring \mathbf{R} , the subring $\mathbf{R}[a] \cap \mathbf{R}[a^{-1}]$ is important. So, in this paper, we study the subring which is integral over \mathbf{R} .